



アイヌ語の品詞分類再考：  
いわゆる人称代名詞をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井筒, 勝信 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00005528">https://doi.org/10.32150/00005528</a>

## アイヌ語の品詞分類再考：いわゆる人称代名詞をめぐって\*

井筒 勝信

北海道教育大学旭川校英語学研究室

### Ainu Parts of Speech Revisited: with Special Reference to So-called Personal Pronouns.

IZUTSU Katsunobu

Hokkaido University of Education, Asahikawa

#### Abstract

The present study is an attempt to reexamine Ainu parts-of-speech systems proposed and developed in the history of Ainu language studies on the basis of the linguistic data of the southwestern and north-eastern Hokkaido dialects of the language. It focuses on the case of so-called personal pronouns, showing that singly none of the previously proposed systems adequately describes the language usage produced by later speakers of the language (Matsu Kannari in the Horobetsu dialect and Kura Sunazawa in the Asahikawa dialect).

#### 1. はじめに

本研究は、アイヌ語学史の中で展開されてきたアイヌ語の品詞分類を北海道南西方言並びに北東方言の言語資料に基づいて追試する試みである。本論考では、事例研究として「いわゆる人称代名詞」の扱いを取り上げ、アイヌ語史上のどの品詞分類も単独では、アイヌ語を母語として用いたより新しい世代（幌別方言に於いては金成マツ、旭川方言に於いては砂沢クラの世代）の言葉を十分

に記述することが出来ないことを指摘する。

アイヌ語の品詞分類は、金田一（1931）によって創始され知里（1936）によって確立される第一段階と、それが知里（1942）によって大きく修正され浅井（1970）によって定着が図られる第二段階、また、前の二段階を踏襲しながらも大きな変革が田村（1988）、中川（1995）によってもたらされる第三段階の三つに分けられる。アイヌ語のいわゆる人称代名詞は、第二段階の品詞分類では「常に連用的に用ひられ、副詞の如き位置に立つ」（知里1942: 547）もので、「それが無くても意味

\* 本稿は、2004年12月11日、国立民族学博物館にて催された「ジェサップ北太平洋調査を追試する」に於いて、筆者が行った「アイヌ語品詞分類の100年—品詞分類を中心として—」と題する発表の原稿に僅かな加筆と修正を加えたものである。

の實質に変わりはない」(前掲書同頁)ものとして記述されるが、第三段階では一転して「名詞の一種」(田村1988: 21)と特徴付けられる。

このように品詞分類の第二・第三の段階でいわゆる人称代名詞の特徴づけに大きな断絶があることはアイヌ語研究史上決して小さからぬ問題である。アイヌ語自体が変化したというよりもアイヌ語の記述・分析・分類の仕方が変化したに過ぎず、それぞれの段階での扱いのどちらが妥当であるのかという問題は、実際のアイヌ語に照らして判断されねばならない。しかし、具体的な方言資料を観察してみると、アイヌ語が実際に変化しつつあり、いわゆる人称代名詞もそのような変化の過渡期にあったことが認識される。

このような事実認識に基づけば、アイヌ語のいわゆる人称代名詞は、知里(1942)らが主張するように基本的には副詞的機能を果たす語類であったが、時代が下がるに連れて田村(1988)らが想定するような名詞的機能をも果たす用法を発達させつつあるものとして特徴付けられる。しかし、そのような副詞的機能と名詞的機能は間違いなく併存しており、この点を正確に捉えてこの品詞の記述をする必要がある。このことから、第二段階での扱いも第三段階での扱いも単独ではいわゆる人称代名詞を正確に特徴付けることが出来ないと言わざるを得ない。双方が提示する特徴づけの両方を参照して初めて、いわゆる人称代名詞の振る舞いを十分に記述することが可能となる。副詞的で選択的な要素に過ぎなかった語類は、名詞的な下位類の一つとしての機能をも獲得し始め、それに応じて人称代名詞という独立した品詞としての位置づけを強化しつつあったとする分析こそが、第二・第三段階での扱いよりも妥当な記述となる。

以下では、先ず第2節でアイヌ語学史の中で展開されてきた主要なアイヌ語の品詞分類を概観し

た後、第3節で主に第二段階と第三段階での「いわゆる人称代名詞」の扱いを精査する。続く第4節、第5節では、北海道南西方言から幌別方言を、北東方言から旭川方言を例として取り上げ、それぞれの方言の具体例からいわゆる人称代名詞が本来の副詞的機能に加えて名詞的な機能を生じつつあったことを跡付ける。

## 2. アイヌ語の品詞分類

田村(1988: 9-10)によれば、アイヌ語の語彙の記録は1602年代初めに来日したイエズス会のイタリア人宣教師、アンジェリス(Jeloramo de Angelis 1567-1623)に始まり、クラシェニンニコフ(Stepan Pétrovich Krasheninnikov)、フランスの海洋探検家ラ・ペルーズ(J. F. de Galaup La Perouse)、ダヴィドフ(Gavriil Ivanovich Davidov)、シーボルト(Franz Freiherr von Siebold)、フィッツマイエル(August Pfizmaier)などの単語集を経て、Dobrotvorskij(1875)、Batchelor(1889)に代表される本格的な辞典に到るまで主にヨーロッパ人によってなされた<sup>1</sup>。それらの中で品詞分類に相当する内容が明示的にであれ暗示的にであれ前提となっていたであろうことに疑いはない。しかし、「これまでのアイヌ語の研究は、日本でも西洋でも、いくつかの先駆的な研究を除いては、布教や政治的意図や商業的利益のためにのみ行われた」(田村1988: 10)のものであり、本格的な学問研究が行われるようになるのは20世紀以降である。田村(前掲書: 10)は、金田一(1931)が「最初のアイヌ語文法研究書といえる」もので、それに続く金田一との共著である知里(1936)と、知里自身の手になる(1942)によって「アイヌ語学の基礎が確立された」と述べている。従って、アイヌ語の品詞分類もここに学問的な起源が見出されると考えるのが妥当であ

1 Piłsudski, Bronislaw の1912年の著作とされる *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore* は、辞書や単語集こそ含んでいないが、同時代としてはかなりまとまった量のアイヌ語テキストを記述したものである。これに対する索引兼辞書として編まれたのが Majewicz and Majewicz (1986) である。

ろう。アイヌ語文法の最初の本格的な研究とされる金田一（1931）を修正・採録した金田一（1960）では、次に挙げた五つを品詞として扱っている。ここでは、後のアイヌ語学で助詞、連体詞、間投詞として扱われることになる語類が品詞として取り上げられない。寧ろ、日本語や朝鮮語にはない人称接辞という文法形式の振る舞いによって形成される動詞活用にかんがりの紙面を割いている。そのような人称接辞とそれに基づく動詞活用についての探究は、金田一（1936）でようやく観察的妥当性を達成する。

金田一（1960）「アイヌ語学講義」での品詞分類：

- ①名詞、②代名詞（人称代名詞）、③形容詞、④副詞、⑤動詞（完動詞・不完動詞）

金田一（1931）で提示された品詞分類の不完全さは、知里（1936）によって補われることになる。そこでは、金田一（1931）の扱った五つの品詞に加えて、「数詞」と「助詞」並びに「感嘆詞」を品詞として設定した。

知里（1936）「アイヌ語法概説」での品詞分類：

- ①名詞、②代名詞（人称代名詞・疑問代名詞・指示代名詞）、③数詞、④動詞、⑤形容詞、⑥副詞、⑦助詞（体言につくもの・用言につくもの〔接続助詞・終助詞〕）、⑧感嘆詞

知里（1942）は、金田一（1931; 1960）並びに基本的にはそれを引き継いだ自らの研究（1936）での品詞の扱いに依然として残る不完全さ・不十分さを批判し、アイヌ語の品詞を大きく次の五つに分ける分類を提案した。

知里（1942）「アイヌ語法研究：樺太方言を中心として」での品詞の大分類：

- ①用詞、②体詞、③連用詞、④連体詞、⑤助詞

①の用詞と②の体詞は、それぞれ国語学で言う用言と体言に相当する。用詞には従来「動詞」、「形容詞」として扱われてきたものが含まれ、目的語や補語を取らない完用詞と取る不完用詞に二分される。前者には従来「完全自動詞」と呼んできたものと「形容詞」と呼んできたものが、後者には従来「他動詞」、「不完全自動詞」と呼んできたものが分類される。また、体詞には「実質名詞」、「形式名詞」、「固有名詞」、「ある種の名詞」として区別される名詞の下位類が含まれる。それまで「代名詞」と呼んできたものは用詞を修飾する品詞として③の連用詞に、「数詞」と呼んできたものは体詞を修飾する品詞として④の連体詞に分類される。

③の連用詞には、従来の「人称代名詞」以外にそれまで「副詞」と呼んできたものが含まれる。④の連体詞には、数連体詞と改名されたそれまでの「数詞」の他に指示連体詞が含まれる。残る語類は全て、何らかの助詞として⑤に分類される。

知里（1942）「アイヌ語法研究：樺太方言を中心として」での品詞の小分類：

- ①用詞 完用詞（完全自動詞・形容詞）、不完用詞（不完全自動詞・他動詞）
- ②体詞 実質名詞、形式名詞（第一種・第二種）、固有名詞、ある種の抽象名詞
- ③連用詞 副詞、人称代名詞
- ④連体詞 指示連体詞（既定指示連体詞・未定〔疑問〕指示連体詞）、数連体詞
- ⑤助詞 法及び態の助詞、終助詞、接続助詞、格助詞、副助詞、係助詞、間投助詞

浅井（1970）は、基本的に知里（1942）の分類を踏襲しながら、機能に基づいて名詞と助詞を再整理し、大分類を適正化するために品詞を一つ増やしながらかも、小分類の簡素化を実現した。知里

の分類で第一種形式名詞とされていたもの (ka(s)(i), pok(i), pa, sam(a) など) を位置名詞, 名詞法接尾辞とされていたもの (-p(e), (h)ike, (i)hi など) を名助詞として再分類した。また, 知里の枠組みでいう「態を表す助詞」の名称を動助詞と改め, 第二種形式名詞とされていたもの (haw(e), hum(i), ru(we), sir(i) など) と an, as, ne といった動詞の組み合わせをその一種として再分析した。また, 知里 (1942) で「間投助詞」とされていたものを, 間投詞として独立させた。

浅井 (1970) 「アイヌ語の文法—アイヌ語石狩方言文法の概略—」での品詞分類

- ①名詞 (普通名詞・位置名詞・固有名詞),
- ②動詞 (完全動詞・不完全動詞), ③連体詞 (指示連体詞・疑問連体詞・数連体詞), ④連用詞,
- ⑤間投詞, ⑥助詞 (格助詞・動助詞・接続助詞・副助詞・終助詞・名助詞)

田村 (1988) は, アイヌ語の品詞が以下の③, ⑨, ⑩を除く七つに分類されると述べているが, 実際に議論を進める中では, [文法] というセクション中の名詞を扱う E というサブセクションの前で独立したサブセクション D を立て, そこで③の人称代名詞という品詞を扱っている。また, [文法] のセクションとは別に [語彙] というセクションを立て, そこでは⑨, ⑩に挙げた数詞と指示詞を別個に取り上げて扱っている。それ以外にも, 知里 (1942), 浅井 (1970) では立てられなかった接続詞を接続助詞とは別に設け, 浅井 (1970) に倣って間投詞も別立てに設定している。

田村 (1988) 「アイヌ語」での品詞分類:

- ①動詞, ②名詞 (普通名詞, 位置名詞), ③代名詞, ④連体詞 (数連体詞・指示連体詞),
- ⑤副詞, ⑥接続詞, ⑦助詞 (助動詞・名詞化助詞・格助詞・副助詞・接続助詞・終助詞),

- ⑧間投詞, ⑨数詞, ⑩指示詞

つまり, 金田一 (1931) と知里 (1936) で固められた品詞分類の第一段階は, 知里 (1942) での大きな修正とそれを基本的に継承する浅井 (1970) によって第二段階へ移行したが, ここに至ってまた新たな転換が提案されたことになる。その証拠に, 知里 (1942) で五つ, 浅井 (1970) で六つであった品詞の大分類は, 最大で十と大きく膨れ上がっている。

このようなアイヌ語学に於ける品詞分類の第三段階は, 中川 (1995) でも着実に継承されると同時に更に発展させられる。第二段階以来, 田村 (1988) に至るまで「数連体詞」という「連体詞」として扱われてきたものは数詞として完全に分離され, 田村 (1988) で「指示連体詞」とされたものを連体詞として扱っている。また, 他の言語の研究あるいは一般言語学的研究との整合性の高い疑問詞という範疇を導入すると共に, いわゆる evidentiality の表現形式を独立した品詞として新たに立て, 文末詞と呼んでいる。

中川 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』での品詞分類:

- ①動詞 (0 項動詞, 1 項動詞, 2 項動詞, 3 項動詞, 連動詞), ②名詞 (普通名詞, 固有名詞, 位置名詞, 代名詞, 形式名詞), ③連体詞, ④副詞, ⑤接続詞, ⑥助詞 (格助詞・副助詞・接続助詞・終助詞), ⑦間投詞, ⑧数詞, ⑨文末詞, ⑩疑問詞, ⑪助動詞

以上述べたように, アイヌ語の品詞分類は第一段階から第二段階にかけて大分類を簡明にすると同時に小分類 (下位分類) を精緻化する方向へと進んだが, 第三段階に至って小分類の更なる精緻化に加えて大分類の精度も高めようとする方針へと移行してきた。このような品詞分類の変遷は, 表 1 のように纏めることが出来る。

表1：アイヌ語の品詞分類の変遷（1931-1995）

金田一 (1936)	名詞	代名詞	副詞	動詞 不完動詞 完動詞		形容詞								
知里 (1936)	名詞	代名詞 人称/疑問代/ 指示	副詞	動詞 不完動詞 完動詞		形容詞	数詞	助詞 +体言/+用言		感嘆詞				
知里 (1942)	名詞 実質/形式/固有/ 抽象	連用詞		用詞 不完用詞 完用詞		連体詞 (数/指示)		助詞 法・態/終/助/接続/格/副/係/間投						
浅井 (1970)	名詞 普通/位置/固有	連用詞		動詞 不完動詞 完動詞		連体詞 数/指示/疑問		助詞 格/動/接続/副/終/名		間投詞				
田村 (1988)	名詞 普通/位置	代名詞	副詞	動詞 他動詞 自動詞		数詞	指示詞	連体詞	接続詞	助詞 助動/名詞化/ 格/副/接続/終		間投詞		
中川 (1995)	名詞 普通/固有/位置/代/形式		副詞	動詞 2項/3項/連 0項 1項			数詞	連体詞	疑問詞	接続詞	助詞 格/接続/ 副/終	助動詞	間投詞	文末詞

### 3. アイヌ語の人称代名詞と人称接辞

金田一（1931），知里（1936）での品詞分類で

は次に挙げた語を含むものとして，代名詞ないしは人称代名詞という品詞が設定されていた。

表2：アイヌ語のいわゆる人称代名詞

	沙流方言	十勝方言	旭川方言	樺太ライチシカ方言
1 人称単数	kani	kuani	kuani	kuani
1 人称複数（除外形）	coka	ciutari/ciokay	ciokay	anoka
1 人称複数（包括形）	aoka	anokay	anokay	
2 人称単数	eani	eani	eani	eani
2 人称複数	ecioka	eciutari/eciokay	esokay	ecioka/eciokayahcin
3 人称単数	sinuma	anihi	anihi	
3 人称複数	oka	okay	okay	

この語類は，知里（1942）に至って次に引用することを根拠に従来の「副詞」に相当する用詞に含められることになる。

アイヌ語には人称接辞があって主格・領格・目的格等をあらはす。従って人称代名詞が主語になったり目的語になったりするのではなく，又はゆる所有代名詞というものも無い。  
 （中略）かくて，代名詞はすべて，(イ)接辞，(ロ)語根，(ハ)他の品詞（名詞又は副詞），等へ解消される。（知里1942：544）（下線筆者）

次の引用から読み取れるように，基本的には主格・目的格の人称接辞が動詞の主語・目的語を標示するため，以前の研究で「人称代名詞」として扱われてきたものは，寧ろ従来「副詞」と呼ばれてきたものと同じであるという明確な主張が提示される。

いわゆる人称代名詞は，指示代名詞や疑問代名詞等と異り，格の形態部をとることができない。主格にも領格にも目的格にも呼格にも立つことが無く，また格助詞の支配をうける

ことも無い。修飾語をとることも無く、従って連体詞を承けることも無い。複合語を造ることも無い。常に連用的に用ひられ、副詞の如き位置に立つ。副詞の中にはその有無によって意味の変わるものもあるが (oman 彼行った, hane oman 彼行かなかった), 人称代名詞は単に強めで、それが無くても意味の實質に変わりはない。ani-oman=oman 彼行った。これは副詞の中の強意的副詞と同じ

である。ただ副詞と異なるのは、単複によって語形を異にすることである。(知里1942: 547) (下線筆者)

これは、いわゆる人称代名詞と次に挙げた人称接辞が必ず一致 (agreement) を起こすことを論拠としており、古いテキストを見る限り、そのような人称の一致は厳然と守られていることが分かる。

表3：アイヌ語の人称接辞 (主格/目的格)

	沙流方言	十勝方言	旭川方言	樺太ライチシカ方言
1 人称単数	ku=/en=	ku=/en=	ku=/en=	ku=/en=
1 人称複数 (除外形)	ci=, =as/un=	ci=, =as/un=	ci=, =as/un=	an=, =an/i=
1 人称複数 (包括形)	a=, =an/i=	a=, =an/i=	an=, =an/i=	
2 人称単数	e=	e=	e=	e=
2 人称複数	eci=	eci=	es=	eci=
3 人称単数	∅=	∅=	∅=	∅=
3 人称複数	∅=	∅=	∅=	∅=..(-hci)

次の引用から、この主張は基本的に浅井 (1970) にも引き継がれていることが分かる。kuani e=kowen=an. という文では kuani の有無に関係なく=an という人称接辞が用いられることから、知里の言うように「人称代名詞は単に強めで、それが無くても意味の實質に変わりはない」ということを前提としている。

kuáni <私>, eáni <君>, anókay <私たち>, ciókay <われら>, esókay (ès-okáy [ ɛf-okáj] という形も現れる) などは代名詞とも認められる。(中略) <私は君が嫌いだ> という意味では、e-kówen-an という表現が用いられるが、代名詞とよばれる kuáni <私> を併用しても、kuáni e-kówen-an. となって、人称接語-an <私が>, がついた動詞の形式が用いられ、kuani は連用修飾形式とも、-an の同格ともみなせる。(浅井1970: 777) (下線筆者)

しかし、浅井はここで論拠となっている人称の一致が成立しない場合もあることに気づいていたらしく、次の引用に見るように、いわゆる人称代名詞に対して知里に比べて微妙な態度を取っている。

代名詞の項 (p. 777) であげた e-kówen-an <私は君が嫌いだ> という文において-an が主語であるとする。また、húci kikir kowén. <おばさんは虫が嫌いだ> という文においては、húci が主部で、主語が∅と同格の関係にたっているとする。したがって、kuáni e-kówen-an. においても、連用修飾形式とも考えられる kuáni が-an と同格の関係にたつ主部とみなせるのである。また、eáni ku-kówen. という表現がときにみられるが、この文では目的格人称接語の e- が現れないで、kikir ku-kówen. <私は虫が嫌いだ> におけると同じ動詞的文節が現れているので、eáni を客語とみなすのである。(浅井

1970: 795) (下線筆者)

ところが田村(1988)では、このようなアイヌ語品詞分類の第二段階とは決定的に異なる立場が打ち出される。次の引用にあるように、田村はいわゆる代名詞を副詞的なものではなく、名詞の一種として明確に位置づけるのである。この立場は、知里(1942)の主張と真っ向から衝突するばかりでなく、浅井(1970)の態度との関係も不明である。何を根拠に、このような大きな方向転換を図ったのかは、明確に述べられていない。

人称代名詞は、名詞の一種である。主語、目的語、補語となり、また、名詞所属形、位置名詞、ある種の後置副詞の前におかれて、これと結合する。ただ、普通名詞と違って、付加語(連体修飾語)に修飾されて名詞の中核になることはない。たとえば、tan hekaci「この少年」、poro e-yupi「大きいあなたの兄さん」とは言えるが、「この私」「大きいあなた」などとは言えない。(田村1988: 21) (下線筆者)

田村のこの立場は、その後のアイヌ語研究で広く継承され、品詞分類の第三段階の一部を形作っていくことになったが、第二段階でいわゆる人称代名詞に対して仮定されていた副詞・連用詞としての地位を否定する根拠が明確に示されない限り、名詞の一種という地位が本当に妥当な特徴づけであるのかは分からない。寧ろ、第二段階での特徴づけのほうが、アイヌ語のいわゆる人称代名詞には妥当である可能性も十分にある。

このように品詞分類の第二・第三の段階でいわゆる人称代名詞の特徴づけに大きな断絶があることは、アイヌ語研究史上決して見逃すことの出来ない問題である。この断絶に関する限り、アイヌ語自体が変化したというよりは、アイヌ語の記述・分析・分類の仕方に変化が生じたという問題に過ぎない。それぞれの段階での扱いのどちらが妥当であるのかという問題は、実際のアイヌ語に

照らして判断されなければならない。しかし、いわゆる人称代名詞と人称接辞が関与するアイヌ語の文法の仕組みは実際に変化しつつあったことが以下の節で示す具体的な資料の観察から事実として確認出来る。このような事実認識に基づいて、いわゆる人称代名詞を変化の過渡期にあるものとして捉えたとすれば、知里(1942)に始まる第二段階での扱いも、田村(1988)に始まる第三段階での扱いも、その正確に特徴付けとしては十分ではないことを以下の二つの節で示す。

#### 4. 幌別方言の人称代名詞と人称接辞の一致

幌別地方のアイヌ語・アイヌ文学の伝承者の中でも、金成モナシノウク、金成マツ、知里幸恵の三名は良く知られている。モナシノウク、マツの二人は親子で、幸恵はマツの姪であると同時に養女である。従って、生年、年齢という点では幸恵の方がマツよりも世代が下なのだが、次に挙げた金成・金田一(1959)からの二つの引用が示すとおり、幸恵は自分の祖母であるモナシノウクの言葉を直接に受け継いだため、(少なくともユーカラなどの語りでは)伯母であり養母であるマツよりも一世代上の言葉を用いていたらしいことが分かる。

私が驚いて、覚えずつぶやいた。

『こんなに日本語が上手で、幸恵さんは、かわいそうに、アイヌ語はちっともできないんでしょうねえ。』

そういう私の言葉尻をひったくるように、まつさんが、

『そのくせ、幸恵ったら、お婆さん子なものですから、片ことからアイヌ語で育って、今では大ていの大人が及ばないんです。お婆さんの口まねで、ユーカラさえやるんですよ。』

(金成・金田一1959: 9-10) (下線著者)

養女の幸恵さんが言って居られたように、[マツは(筆者)]フチ(祖母)とは一代ち



がって、言葉が時々ちがう。フチの pirka が、女史 [マツのこと (筆者)] では常に pirika になり、また utar, kur, kor, shir が時々 utara, kuru, koro, shiri になる類である。また日高地方にもある「我が妹」 atureshi が akot turesh と混交を生じて屢々 akot tureshi となる等々、これは バチラー博士のアイヌ語もすでにそうであった。若いのにひとり幸恵さんは、フチの正格なアイヌ語だったので、この点を私に切言してくれていた。(金成・金田一1959: 20) (下線著者)

このような用いる言葉という点での世代差には、人称代名詞の用法の差が見出される。多くの場合、英雄の物語の中で用いられる一人称の代名詞 aokay, 二人称の代名詞 eani が用いられる場合には、それらと数と格の一致する人称接辞 a= または =an, e= が動詞に付く。一人称の代名詞 aokay が主語の場合には、(1a-e) のように一人称主格の人称接辞 a= ないしは (1f) のように =an が付く。二人称の代名詞 eani が主語または目的語として用いられる場合には、(1f-h) のように e= が動詞に接頭する。

- (1) a. **Aokay** assa/=an katu sino/wen=**an**\_ hawan./ (Y2107)  
わたしがたのんだ/ことはまことに/わたしがわかった、 /
- b. **aokay** anakne/e=onaha yupuhi/**a**=ne wa./ (Y6037)  
われとても/汝の父の兄で/我はあるのだ。 /
- c. **aokay** anakne/Tomisanpeci/Sinutapka ta/tumpuorunkur/**a**=ne wa/ (Y6172)  
われこそは/トミサンベチ/シヌタプカに/曹司の中に育った人が/我であって /
- d. **aokay** utar/tewano/kamuy ewaki/**a**=kohekompa/kusune./ (Y4294)  
わたくしたちは/ここから/神の居城/へ帰ろうと/します、 /
- e. **Aokay** hene/a=matne-nitpo hene/ikkewe wen pe/eikurkasi tamomare/somo **a**=ki na./ (Y5223)  
我でも/我が女孫でも/元のわるい者/に加勢すること/我はしないぞ。 /
- f. **aokay** tapne/e=siknure/=**an** ruwe an/. (Y1159)  
わたしは/お身を生かしてあげ/たのであります。 /
- g. **eani** anak/Katken tono/kor\_tures/**e**= ne ruwe ne./ (Y2418)  
お前は/カッケンの頭 (かしら) の/妹 (で) /あり、 /
- h. **eani** ne yakka/pokna mosir/**e**=nukare=**an**/rusuy ruwe ne./ (Y1393)  
汝にもまた/冥界の国を/われ汝に見せて/やりたいのだ。 /

ところが、マツの手になるユーカラのテキスト (金成まつ・金田一京助1959; 1961; 1963; 1964; 1965; 1966; 1966) には、(2)に挙げたように一人称ないしは二人称の代名詞を主語または目的語として用いていながら、それに一致する人称接辞が用いられない例が散見される。(2a)では aokay と

いう主語を受ける自動詞 wen に =an が接尾しておらず、(2b-c)では同様に aokay を主語に取る kar, kasuy に a= が付いていない。(2d)では aokay が orowano の目的語になっているので、orowano の前には対応する目的格の人称接辞 i= が接頭してもよさそうだが、そのようになっていない。

- (2) a. **aokay** utar/sino **wen** ruwe ne./sino sonno/yayapapu=**an** na./ (Y1216)  
わたしたち/まことに悪かった、/まことに本当に/あやまります。 /
- b. naani pakpe/a=ekarkar\_hi/opittano/ **aokay kar** pe/koraci ne./ Y1345-1346)  
すんでのこと/彼のされたことは/みな/わたしがしたの/と同じだ。 /

- c. hemanta wen/rakko cikoikip/ newaanpe/nekona sino/a=aktonoke/ koiki wa/ (Y3074)  
 何とわるい/ラッコ獣/そのものを/どう本当に/わたしの弟が/殺そうとして/  
**aokay** ne yakka/a=easkai pakno/a= akihi **kasuy** korka/a=aktonoke/a=ikorayke./ (Y3074)  
 わたしも/出来るだけ/弟を手伝ったけれど/わたしの弟が/殺された、 /
- d. Sonno an pe/Nukes-tono-mat/a=assa ruwe/ne korka/ (Y2104)  
 ほんとうのことは/ヌケシ姫 (に) /わたしがたのんだこと/であるけれども/  
**aokay orowano**/hoskino/a=assa\_hi somo ne./anihi orowano/e=mi kuni p/ (Y2104)  
 わたしから/さきに/注文をしたのではない、 /彼女から/お身の着るものを/  
 kar\_rusuy ari/yayuntek kane/tup sonko/rep sonko/i=koekte/a=eramusitne./ (Y2105)  
 つくりたいと/のぞんで/二つのたより/三つのたより/わたしへくれて/うるさかった。 /
- e. E=kor unarpe/Iskar ta/okkaipo sinen/menoko tun pis/yaykosapte./ (Y7058)  
 汝の叔母が/石狩にて/男の子を一人/女の子を二人/設けた。 /  
**Aokay eani**/sinennepo/a=yaykosanke awa./ (Y7058)  
 私は汝/ただ一人ぼっちに/生まれたものだったが、 / [私は汝ただ一人を生んだのだが (著者記)]
- f. **eani** somo/**ikaopas** yakun/aynu mosir/a=eyam na./ (Y2140)  
 お身がもしも/救援に出かけなければ/人間の国が/わたしは心配だ。 /
- g. **eani** hene/**aokay** hene/**kor** kusune p/ne wa kusu/ (Y3080)  
 お身でも/わたしでも/持とうもの/であったから/

(2e)では主語の aokay に一致して人称接辞 a=が付いていると言えても、目的語の eani と一致する人称接辞が現れていない。このような一人称主格と二人称目的格の組み合わせで「私がお前を」という関係を意味する動詞は(1f)や(1h)でのように e=動詞=an という形を取るはずだが、(2e)では a=yaykosanke 「私が彼(女)(等)を生む」という形になっている。また、(2f)では eani が主語として機能しているにも関わらず、それと数・格の一致する e=は動詞に接頭されていない。

(2g)に至っては、主語として機能しうる eani, aokay のどちらとも人称接辞が一致しない。

このような、人称代名詞と人称接辞の不一致は、マツよりユーカラなどに用いる言葉が一世代上の幸恵のテキスト(知里1978; 切替2003)では見出

されない。当該テキストは、神々の物語(神謡, カムイユーカラ)であるため、aokay の例は(3a)の一例しかないが、後続の動詞 kor には数と格の一致する a=が接頭している。また、二人称代名詞 eani が主語となっている(3b)でも、それを受ける動詞 ne には対応する人称接辞 e=が付いている。英雄の物語では一般的に aokay が一人称代名詞として用いられるのに対して、神々の物語では典型的に ciokay が用いられる。この ciokay が主語として現れる(3c-k)のような場合には、全て呼応する人称接辞 ci=または=as が動詞に付けられている。つまり、(2)のマツのテキストに散見されたような人称代名詞と人称接辞の不一致は一つも見出されない。

- (3) a. toan cikappo/kamuy cikappo/**aokay utar**/a=kor konkani ay ka/somo uk ko./ (K01033-01034)  
 あの鳥/神様の鳥は/私たち/の金の小矢でも/お取りにならないものを/
- b. **eani** anak/pon horkew sani/**e**=ne ruwe tasi/an ne./ (K06060-06061)  
 お前は/小さい狼の子/なの/さ/

- c. **ciokay** ne\_yakka/a=**un**=koonkami/ (K01195)  
私も/みんなに拝されました/
- d. **ciokay** anak/kamuy huci/cise kor kamuy/nusa kor huci tura/uwenewsar=**as** kor/ (K01198-01199)  
私は/火の神様や/家の神様や/御幣棚の神様/と話し合いながら/
- e. **ciokay** ne\_yakka/aynu utar/sermakaha/hempar ne\_yakka/**ci**=ehorari./ (K01227-01228)  
私も/人間/の背後に/いつでも/座して/
- f. **ciokay** ka/pasta kamuy/**ci**=ne somo ki ko./ (K04091-04092)  
私も/ただの身分の軽い軽い神でもないのに/
- g. **ciokay** anak/tane onne=**as**/tane rettek=**as**/ki wa kusu./ (K07115-07116)  
私は/もう年老いて/衰え弱った/ので/
- h. **ciokay** anak/ikir\_tukari/**ci**=tuye amset/amset kasi/**ci**=ehorari./ (K08004-08005)  
私は/宝物の積んである傍らに/しつらえた高床/その高床の上/に座って/
- i. **ciokay** anak/otasutunkur/**ci**=ne wa/ (K08117)  
私は/オタシュツ村の人/であって/
- j. **ciokay** anak/tane tan koraci/toy ray wen ray/**ci**=ki siri tap an na./ (K09040-09041)  
私は/もう今このように/つまらない死に方悪い死に方/をするのだ/
- k. **ciokay** ne\_yakka/ear kaparpe/**ci**=yaykonoye/ (K11049)  
私も/薄衣一枚/を身に纏って/

(2)に見出されるような人称の不一致は、アイヌ語学ではしばしば「アイヌ語文法の崩れ」あるいは「アイヌ語日本語化の兆し」として扱われ、用いる言葉にそのような現象を含むアイヌ語話者は時に「不完全な話者」として明示的ないし暗示的に区別されるようである。しかし、3節で見たアイヌ語のいわゆる人称接辞の二つの異なる扱いに照らして見るとき、この人称の不一致は「崩れ」でもなければ「日本語化の兆し」でもないことが分かる。

古い時代には知里(1942)の言うように、動詞の主語・目的語は人称接辞によって必ず標示されたため、いわゆる人称代名詞はそれが無くても論理的な意味に変わりが無い副詞的な要素であった。しかし、時代が下るに連れて名詞的な要素として再解釈・再分析されるようになり、それを受けて後続する動詞が通常の名詞を主語に取る場合と同様な形を取るようになり始めたといえることが出来る。従って、マツ以前の世代の言葉では、もっぱら副詞的な要素として用いられてきたいわゆる人称代名詞という語類がマツくらの世代の

言葉では名詞的な要素として用いられる用法を生じ始めたということである。これは、アイヌ語自体の言語変容あるいはその文法体系の変容として捉えるべき内容であり、「崩れ」でも「日本語化の兆し」でも決してない。

## 5. 旭川方言の人称代名詞と人称接辞の一致

前節で見たような言葉の世代差によるいわゆる人称代名詞の用法の違いは、旭川方言でも見出される。旭川方言のアイヌ語・アイヌ文学伝承者で、最も多くのテキストを世に遺し、最も良く知られているのは、杉村キナラブック、砂沢クラの両名である。この二人もやはり一世代ほどの年齢差があり、それに加えて言葉という点でも先の金成マツ・知里幸恵に見出されるほどの世代差があることは良く知られている。幌別方言で一世代前の言葉を受け継いだ知里幸恵のテキスト(知里1978; 切替2003)ではいわゆる人称代名詞とそれに後続する動詞に付く人称接辞の間に数・格の不一致は見出されなかったように、(4)から(5)に引用した杉

村キナラブックのテキスト（杉村・大塚・三好・ 2002, 2003a, 2004）でもそのような人称の不一致は見つからない。  
杉村1969; 杉村・大塚・中川1990; 井筒（編）

- (4) a. **anokay** \_anak nep ka wen/kamiyasi **an**=ne ru ka somo ne./ (0103814-0103815)  
私は何も悪い/化け物ではないのであるよ。
- b. an ru ne korka **anokay** anakne/iaknekur an=ne wa oka=**an**\_a\_hike/ (0104717-0104718)  
いるけれど私は/その弟であって暮らしていたところ
- c. e=inu katu ene anihihhi, **anokay**/anakne nep oyapihi **an**=ne ru/ka somo ne wa.../  
お前は聞くのは、私は/何も他人で/もなく、 / (0105210-0105212)
- d. **anokay** wen=**an** hi ne sekor/kamuy menoko/yayetuytak (0403272-0403274)  
私が悪かったのだと/神の女性は/身の上話をした。
- e. V **anokay** ka wen=**an** ruwe ne. (0526417)  
私も悪かったのだ。
- f. **anokay** ka/sampewen=**an** kane/oka=**an**\_ayne (0527719-0527721)  
私たちも/気分が悪くなって/いると
- g. **anokay** anakne nep ka/wen kewtum **an**=kor wa ene/oka=**an**\_hi ka somo ne. (0920604-0920606)  
私は何か/悪い心を持っていて、あんなふうで/あったわけではないのだよ。
- h. V **anokay** anakne hoku ka **an**=kor... (1208313)  
私は夫もいて、
- i. tanpe patek monrayke ne an=kor/oka=**an** pe ne\_hike/an=\_saha ka poro/**anokay** ka poro=**an**  
そればかり仕事にして/暮らしていると、/姉も大きく/私も大きくなって (1233307-1233310)
- j. **anokay** tun **an**=ne wa/e=kor=**an** ne ya? (Yukar 62071)  
私達は二人であって/お前を捕まえてるんじゃないの？

(4a-j)では、いずれの場合も一人称の代名詞 **anokay** が主語として用いられており、それを受ける動詞 ne, ne, ne, wen, wen, sampewen, kor と oka, kor, poro, ne と kor には主語と数・格が一致する人称接辞 an=ないしは=an が付いて

いる。ciokay や kuani は手元のテキストには見つからない。また、キナラブックは口語のテキストを殆ど残していないため eani の例も極めて少ないが、(5)に示すようにそれらの例でも人称代名詞と人称接辞の不一致は観察されない。

- (5) a. **eani** anakne nep **e**=iki/yakka e=yupi akkari nep **e**=iki/yakka eikaun pe **e**=ne.../ (0103321-0103323)  
お前は何を/にも兄より何を/しても、優れているもの
- b. **eani** anakne/nep\_**e**=iki yakka an=tamkasure p/**e**=ne kusu **e**=uytek=**an**.../ (0106005-0106007)  
お前は/何をしても誰に刀で切られることもない者/であるから、お前を遣わした
- c. **eani** anakne/pet tutom un kur/**e**=ne wa.../ (0619219-0619221)  
お前は/川の中ほどに住む者/お前であって
- d. V **eani** anak menoko **e**=ne kusu (1228304)  
お前は女性だから

それに対して、年齢的にも用いる言葉の点からもキナラブックより一世代下の砂沢クラの手になる(6)から

(8)のテキスト（砂沢・切替1983；井筒2002, 2003a, 2004）では、4節の金成マツで見たのと同様な人称の不一致が散見される。(6a)では一人称の人称代名詞 *kuani* が主語になっているため、(6b)のように対応する人称接辞 *ku=*が動詞 *poro* に接頭すべきところだがそうになっていない。(6a)の例は、(4i)と対照的である。同様に(6c-e)のよ

うに一人称の人称代名詞 *anokay* が主語で用いられている場合には、(4)でのようにその主語を受ける動詞に数と格の一致する *an=*または *=an* が付くはずだが、付いていない。(6c)は(4a-c)と、(6d)は(4g-h)と、(6e)は(4d-e)と、(6f)は(4j)と好対照である。

- (6) a. **kuani iyotta poro**, asikne pa ne. (1103701)  
私が最も年上の五才だった。
- b. **kuani iyotta ku=pon korka** (1104607)  
私は一番年下だけれども
- c. **anokay anak/u nep ka oyapihi ne/somo tapan na./** (0109018-0109020)  
私は/何も怪しい者/ではないよ。 /
- d. *an=omante*” sekor itak korka **anokay/kor** raunkut *an=ama wa ne raunkut/* (1000147-1000148)  
私たちは彼を送るのだ。」と言うけれど私の/下帯を私は置いて、その下帯を/
- e. *ne ukuran acapo cinita/a wa ne eper ene itak\_hi./* “**anokay wen** kusu ene sirki./ (1105713-1105715)  
その夜おじさんが夢を見/たら、その熊が言うことには、 / 「私が悪かったのでこうなった。 /
- f. **ciokay tun ne** Sousnay/kim ta paye=as./ (1112609-1112610)  
私達は二人で添牛内/の山に行った。 /

前節の最後でも述べたように、(6)に見出されるような人称の不一致は、アイヌ語学でしばしば言われるような「アイヌ語文法の崩れ」あるいは「アイヌ語日本語化の兆し」では必ずしもない。古い時代にはそれが無くても論理的な意味に変わりがなく、もっぱら副詞的な要素として機能したいわゆる人称代名詞は、時代が下るに連れて名詞的な要素として再解釈・再分析されるようになり、それを受けて後続する動詞が通常の名詞を主語に取る場合と同様な形を取るようになり始めたこと捉えるべきである。旭川方言に於いても、いわゆる人称代名詞はキナラブックの世代の言葉ではもっぱら副詞的な要素として用いられてきたが、クラの世

代の言葉では名詞的な要素として用いられる用法を生じ始めたということである。これは、幌別方言の場合と同様、アイヌ語の自体の言語変容あるいは文法体系の変容として捉えるべき内容であり、「崩れ」でもなければ「日本語化の兆し」でもない。

そのような言語ないし文法の変容として見るとき、次のような例も決して「崩れ」や「破格」ではなくなる。(7a-b)では人称代名詞が用いられていないが、(7a)の *paye*、(7b)の *ipe* と *rikip* に付いている人称接辞が一人称の *=as* であることから、*tun ne* の *ne* に付くべき *ci=*が脱落しているという見方も可能であり、実際そう見られることも少なくない。

- (7) a. *orwa ku=kor kur monrayke kusu/Naie ekota* **tun ne/paye=as./** (1112901-1112903)  
それから私の夫が仕事をしに奈井江に二人で行った。
- b. *ipe=as tek tun ne/rikip=as a wa.../* (1114606-1114607)  
食事の後2人で/登ってみると/

けれども、(8a)のように三人称主語の場合に用いられる *tun ne* という形が一まとまりの副詞表現として慣習化され、もはやそれ以上分析されなくなったとすれば、(7)のように文の主語が一人称の

場合に用いられても不思議ではない。同様に副詞化したために人称変化をしなくなった表現は、*tuymano* 「遠く」、*tunasno* 「早く」、*totekno* 「元気に」、*utatturano* 「皆共に」など他にもある。

(8) a. *ne pa ta acapo utar tun ne/kimun a wa...* / (1105413-1105501)

その年に、おじさんたち二人で/山猟をしていて、

b. *ciokay anakne/Ponmukaetoko sekor rean\_hi ne/sap=an wa okay=as* / (1103210-1103212)

私たちは/ポンムカエトコというところに、/私たちは下って(そこに)居た。

当面、人称の不一致として本当の意味で取り扱いが困難になるのは(8b)のような場合に制限される。このような例でさえ、分析が進めば何らかの使い分け、異なる原理に基づく使用として再認識される可能性がある。

このように、人称代名詞と人称接辞の不一致と見られる現象は、いわゆる人称代名詞に対してそれまでの「副詞的要素」としての地位に加えて、「名詞的要素」としての地位を付与することによって生じるアイヌ語自体の変容として動的に捉えるべきである。ここで述べたような文法や品詞の変容は、多くの言語に見られるごくありふれた現象であり、且つそれは「崩れ」や「破格」として記述されるべきことがらでは決してない。

身近な言語に例を取れば、古い時代には形容詞的要素として名詞修飾の機能しか持たなかった日本語の『すごい』という語形は、現代では少なくとも普通に副詞的に用いられて用言を修飾する機能を持っている。従って、この語形が形容詞的要素なのか副詞的要素なのかという二者択一の問いに答えようとする自体が言語事実に合わない。この語形は、形容詞的要素としての用法と副詞的要素としての用法の両方を持っていると記述すべきである。また、英語の *on* という語は *on the table* のように名詞を目的語に従える前置詞としての用法を持つ一方で、*put on* や *go on* のように必ずしも目的語を従えない不変化詞としての用法をも持っている。これに関して、*on* は前置詞か副詞かという問いを立てること自体が不適

当である。日本語の『すごい』同様、前置詞としての用法と副詞としての用法の両方を持っていると記述すべきである。

これらと同じように、アイヌ語のいわゆる人称代名詞も「強意的副詞」としての用法と「一種の名詞」としての用法の両方を持つ語類として記述するのが妥当である。上記二例とやや異なるのは、時代を遡れば遡るほど、世代が上になればなるほど、もっぱら「強意的副詞」として用いられる傾向が強く、時代を下れば下るほど、世代が下になればなるほど、「一種の名詞」として用いられる傾向が増してくるという世代差が観察される点である。

以上の論拠から、金成マツや砂沢クラのような世代のアイヌ語を記述する上では、知里(1942)・浅井(1970)がいわゆる人称代名詞に対して取る姿勢も、それと真っ向から衝突する田村(1988)以降の学者の立場も、それぞれ単独では十分な妥当性を達成できないことが分かる。双方が提示する特徴づけの両方を参照して初めて、いわゆる人称代名詞の振る舞いを十分に記述することが出来る。従って、この品詞に関する限り、第三段階の品詞分類は第二段階での品詞分類の代案とはなり得ない。金成マツや砂沢クラのような比較的新しい世代のアイヌ語を記述するには、これら二つの段階のどちらでもない第四段階の品詞分類を模索する必要がある。アイヌ語の正確な記述のためには、古い時代のアイヌ語から一見逸脱するように見える用例を安易に「崩れ」や「破格」として扱

うのではなく、言語事実の精査を通してアイヌ語自体の変容を的確に捉えようとする姿勢が重要である。

## 6. おわりに

本論考では、アイヌ語学史の中で展開されてきたアイヌ語の品詞分類を追試する試みの一つとして、「いわゆる人称代名詞」の扱いを取り上げ、北海道南西方言の一つ幌別方言と北海道北東方言の一つ旭川方言を具体例として用いながら、アイヌ語を母語とするより新しい世代（金成マツや砂沢クラのような世代）の言葉を十分に記述することが出来る特徴づけを模索した。アイヌ語のいわゆる人称代名詞は、北海道南西方言の一つ幌別方言と北海道北東方言の一つ旭川方言のテキストに関する限り、より古い世代では知里（1942: 547）の言うように「常に連用的に用ひられ、副詞の如き位置に立つ」もので、「それが無くても意味の實質に変わりはない」「強意的副詞」であったが、より新しい世代では田村（1988: 21）の記述にあるように「主語、目的語、補語となり」、それが無いと意味が変わってしまう「名詞の一種」としても用いられ始めていたことが確認できる。このことから、新しい世代のアイヌ語、殊にそのような世代の言葉の「いわゆる人称代名詞」をも記述しようとする、これまで提案されてきたどの品詞分類も単独では十分な妥当性を達成できないと判断せざるを得ない。知里（1942）・浅井（1970）の提唱するの「副詞的要素」としての扱いと田村（1988）以降のアイヌ語学者が支持する「名詞的要素」としての扱いの二つを併せ持つ品詞として「いわゆる人称代名詞」を再度認定しなおす必要がある。

もっぱら「副詞的要素」として用いられた世代と「名詞的要素」としても用いられるようになった世代との差異は、金成マツや砂沢クラのような話者が存命の時から夙にアイヌ語学に於いて気づかれてはいた。しかし、「名詞的要素」としての用法は、アイヌ語の「崩れ」や「破格」とみなさ

れ、時には「完全な話者」、「良い話者」を選り分けるための試金石の一つとされてきた嫌いがある。「人称代名詞と人称接辞の不一致」という言い方自体にも、「崩れ」や「破格」としての見方が程度の差こそあれ反映されているかもしれない。けれども、一見「人称の不一致」と見られる現象は、いわゆる人称代名詞に対してそれまでの「副詞的要素」としての地位に加えて、「名詞的要素」としての地位を付与することによって生じるアイヌ語自体の変容として動的に捉えるべきである。同様な文法や品詞の変容は多くの言語に見られるごくありふれた現象であり、そのような動的な側面の丹念な記述の積み重ねによってこそ言語の通時的理解と共時的記述が統合され、より有益な言語分析が可能となることは、Traugott and Heine（1991）や Hopper and Traugott（1993）に代表される文法化（grammaticalization）についての数々の研究が示すところである。

本論考での具体的なアイヌ語資料の観察結果に加えて、このような一般言語学的な理解に照らしても、田村（1988）以降のアイヌ語学で採用されている第三段階の品詞分類は（少なくとも「いわゆる人称代名詞」に関する限り）知里（1942）・浅井（1970）による第二段階の品詞分類の代案とはなり得ない。金成マツや砂沢クラのような比較的新しい世代のアイヌ語を記述するには、これら二つの段階のどちらでもない第四段階の品詞分類を模索する必要がある。「いわゆる人称代名詞」は、そのような新たな品詞分類で「副詞的要素」と「名詞的要素」の二つの機能を併せ持つ品詞として正確に記述されなければならない。他の言語においても同様だが、異なる世代の話者から得られた言語資料を用いて文法の記述を行うなら、古い時代の使用例とそこから導かれた文法記述に照らした場合に一見逸脱するように見える用例を安易に「崩れ」や「破格」として扱うことは回避しなければならない。言語事実の精査を通して、アイヌ語自体の変容を的確に捉えようとする姿勢が強く求められるのである。

## 参考文献

- 浅井亨. 1970. 「アイヌ語の文法—アイヌ語石狩方言文法の概略—」アイヌ文化保存対策協議会（編）『アイヌ民族誌』東京：第一法規出版.
- 井筒勝信（編）. 2002. 『アイヌ語旭川方言コーパスに基づく辞書編纂のための基礎研究』旭川：北海道教育大学.
- 井筒勝信（編）. 2003 a. 『アイヌ語旭川方言コーパスに基づく文法書編纂のための基礎研究』旭川：北海道教育大学.
- 井筒勝信（編）. 2003 b. 『アイヌ語旭川方言辞書草案』旭川：北海道教育大学.
- 井筒勝信（編）. 2004 『アイヌ語旭川方言資料集成1』旭川：北海道教育大学.
- 金成まつ・金田一京助. 1959. 『アイヌ叙事詩ユーカラ集 I』東京：三省堂.
- 金成まつ・金田一京助. 1961. 『アイヌ叙事詩ユーカラ集 II』東京：三省堂.
- 金成まつ・金田一京助. 1963. 『アイヌ叙事詩ユーカラ集 III』東京：三省堂.
- 金成まつ・金田一京助. 1964. 『アイヌ叙事詩ユーカラ集 IV』東京：三省堂.
- 金成まつ・金田一京助. 1965. 『アイヌ叙事詩ユーカラ集 V』東京：三省堂.
- 金成まつ・金田一京助. 1966. 『アイヌ叙事詩ユーカラ集 VI』東京：三省堂.
- 金成まつ・金田一京助. 1966. 『アイヌ叙事詩ユーカラ集 VII』東京：三省堂.
- 切替英雄. 2003. 『アイヌ神謡集辞典：テキスト・文法解説付き』東京：大学書林.
- 金田一京助. 1931 「アイヌ語ユーカラ語法摘要」『アイヌ語叙事詩ユーカラの研究2』東京：東洋文庫.
- 金田一京助. 1993 [1960] 「アイヌ語学講義」『金田一京助全集第5巻：アイヌ語 I』東京：三省堂.
- 金田一京助. 1993 [1936] 「アイヌ動詞の第三類—複合動詞の人称形に就て—」『金田一京助全集第5巻：アイヌ語 I』東京：三省堂.
- 杉村キナラブック・大塚一美・三好文夫・杉村京子. 1969. 『キナラブック・ユーカラ集』旭川：旭川叢書編集委員会.
- 杉村キナラブック・大塚一美・中川裕. 1990. 『キナラブック口伝アイヌ民話全集』札幌：北海道出版企画センター.
- 砂沢クラ・切替英雄. 1983. 『私の一代の思い出』札幌：みやま書房.
- 田村すず子. 1997 [1988]. 「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一『日本列島の言語』東京：三省堂.
- 知里真志保. 1974 [1936]. 「アイヌ語法概説」『知里真志保著作集4：アイヌ語研究編』東京：平凡社.
- 知里真志保. 1973 [1942]. 「アイヌ語法研究：樺太方言を中心として」『知里真志保著作集3：アイヌ生活誌・民俗学編』東京：平凡社.
- 知里幸恵. 1978. 『アイヌ神謡集』東京：岩波書店.
- 中川裕. 1995. 『アイヌ語千歳方言辞典』東京：草風館.
- Batchelor, John. 1889. 『蝦和英三對辭書』札幌：北海道庁.
- Batchelor, John. 1926. *An Ainu-English-Japanese Dictionary*, Third edition. In Refsing, Kirsten. (ed.). 1996.
- Dobrotvorskii, Mikhail Mikhailovich. 1875. *Ainsko-Russkii Slovar'*. In Refsing, Kirsten. (ed.). 1996.
- Hopper, Paul J and Traugott, Elizabeth Closs. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Majewicz, Alfred F and Elżbieta Majewicz. 1986. *An Ainu-English Index-Dictionary to B. Piłsudski's Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore of 1912*. Poznań: Adam Mickiewicz University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs and Bernd Heine, (eds.). 1991. *Approaches to Grammaticalization*, I & II. Amsterdam: John Benjamins.
- Refsing, Kirsten. (ed.). 1996. 『アイヌ語：ヨーロッパ初期文献復刻集成』1-10. 東京：日本シノプス.

(旭川校助教授)



